

第107回 奈良県産業教育審議会（要旨）

1 会議

- 日時 令和2年1月24日（金）13時30分～16時30分
- 場所 県立御所実業高等学校
- 出席者 審議委員：中山徹、坂西明子、安永龍子、山口智美、時實啓二、吉田和嗣、山田貴志
（公開授業、学校紹介：県立御所実業高等学校の教職員及び生徒）
県教委：大西英人教育次長、大石健一学校教育課長、山内祐司教育政策推進課主幹、
井上和彦高校教育係長、田中新也、宮久保雅行、辻誠、辰巳理恵子、堀山佳則 各指導主事
- 役員選出 会長に中山徹委員、副会長に坂西明子委員を選出

2 内容

- ・公開授業
- ・御所実業高等学校実習棟視察
- ・学校紹介、学科紹介
- ・審議

3 審議概要

○公開授業について

- ・発表に至るまで、長期の計画を立てて取り組んでおり、内容がよく伝わってきた。言葉に風格があった。これは、先生方の普段の教育の賜だと思った。本当に感心した。
- ・チームで進めているところがよい。リーダーやサブリーダーが出てきて、子ども目線で議論することで、子どもは成長していく。
- ・それぞれ課題を見つけていく過程が大切。課題の焦点を絞るのが難しいと思うが、それができていた。1年生の時から先輩の発表を見ており、自分たちも3年生になったら何をするか考える機会をもって生活をしているということがわかった。
- ・資格取得の目的があり、技能を高める上でも目的があるのは、他の高校や大学も含めて、モデルになる試みであり、参考になった。

○適正化を踏まえた今後の奈良県の産業教育の在り方について

- ・インターンシップや職場体験など働いている大人と一緒に働くのは情操教育として大切。子どもたちに、親が苦勞してることで、自分たちが学校に行くことができていることに思いが至る良い機会である。適正化実施計画にも、そういったことが書かれている。インターンシップや職場体験を受け入れてくださる会社は多いので、そういった会社を使ってほしい。もっと拡大してほしい。
- ・学校で学ぶのと社会に出るのは違う。学生も顔色が違う。現実味を感じ、勉強に対する姿勢も変わってくる。社会で現実を知ること、学生にとって大事なこと。

- ・受入企業等に、学校の思いをどう理解いただくか、学校としての戦略をどう伝えていくのか、それに協力してもらえるのかも含めて、相談・説得をしないとイケない。
- ・適正化などがあっても、県民性からか、1年目は様子を見るという状況が考えられる。何を学ぶ学校か、分かりやすい名前であることが大切。
- ・自分のやりたいことを早い時期に見つけるということは、子どもたちは苦手。実業系の学校について、やりたいことを見つけてそれを進学や就職に繋げていくということを、中学校でも伝えていきたい。
- ・地域の方からは、学校が色々な物や環境が遅れているのはだめだと言われる。子どもたちが、物を使いこなし、いかに活用できるかというのが、教員だけでは厳しい。支援員が必要ではないか。
- ・我々の高校の頃より、今の高校は、大変専門的な学びがある。薬品科学科などは、医学部や薬学部に入學するのは難しい面があるかもしれないが、卒業後に薬品関係の会社で働けるのはよい。
- ・色々な事を体験してみて、動機付けをさせることが大事だ。
- ・適正化実施計画を見ると、2021年度に新しく変わる学校が集中している。受験する中学生への周知などは、HPで見られるとのことだが、一斉に変わるというのは不安定になる。受験する中学生のニーズやどう変わるかというところの周知に努めて欲しい。
- ・奈良南高校では、専攻科が設置される。どれぐらいの生徒が、そこに入学するか。また、教育をする方のマンパワーの課題、教育の準備も多いかと思う。その辺も含めて充実をして、従来の大学、短大、専門学校、就職以外の選択として、この専攻科が良く機能してくれればいい。
- ・今後、子どもの数が更に減る。そういう意味では高校の在り方を検討するというのは、政策的には当然課題には出てくる。ただ、地域で高校が減ってしまうと、地域にとって厳しい状況が生まれる。大学くらいになると、地域から離れて大学に行っても普通だが、高校に通いにくい地域が増えると、中学を卒業すると、一家で都会に引っ越してしまうという例もある。そのため、子どもが減っていく中で、高校をどうしていくかという課題と同時に、地域との関係で高校をどうしていくのかというのも重要な課題になる。適正化を進めても、地域にマイナスの影響が出ないように考えていくことが重要。コンセプトの「魅力と活力のあるこれからの学校づくり」にあるように、単に縮小だけではなく、どうやって高校の魅力を引き上げていくのが大切。高校が社会とどう繋がるか、地域とどう繋がっていくかが柱になっている。地域を教育の場として位置付け、地域に関心を持って、将来地域で生活してくれるような子どもをどう作っていくのか、自分たちで課題を発見していく力をどう付けていくか。子どもが減るということで再編を進めつつも、一方で、適正化で強調されている高校そのものの魅力をどう作り出していくのか、平行して進めていくことが、非常に重要。